家實往來

全

7454

凡生世ふるゝ
ざゝある人あの
書をとくと見
る時わ招ぎ
して福徳
来りぎ
して延年
長久なしむ
如ようとよろこ
よく行ひ万事
自他の幸ひ
うゝん

抑世の人のよろこ
ぶのんぎるのの金
紙銭を第一とし
まれともよく出
れば金紙銭を
湯水のごとつか
すてたとひこぶ
内ふかをうとも
やとり世ぶる国用

家宝財産来
夫金銀米銭布の世
中の宝ものとせん宝
抑そのなすされべこそ
古ふる我白国の風

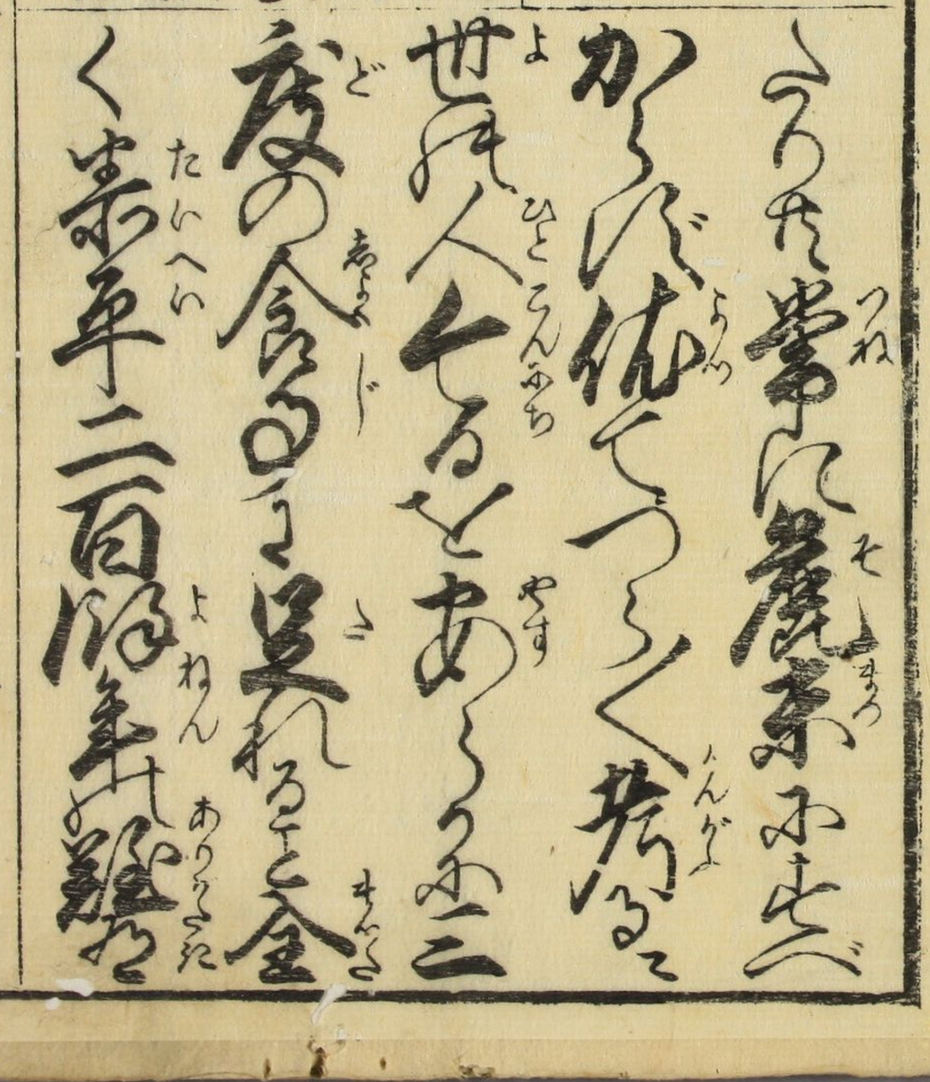
あてこうとこの気のものなり又布ハたとへ俗方なくなりこうとも我ありきたりの衣ふく大タフせべ丈年六年ハふ一ハ也うるく一まへそも寄こ能い志のぐべく又いるのるらびむこうと月きとひてもきあびまむるるりまして去るうふいこうそハたぐうゆても白こうび只米のこハ

俗として弁すも色を捨
ふんせ所こうの
意ふ又仏ものも及べ俗
あ〳〵夫が中にもこの
ひれ人命れ根

これらとこうり給して去まへそれぞりゆて藁まよまれべんさうこうる是よこうと日くの入有ひたゞしく実のるこハ一年よ只一反のこうりこを

ぬかみ〳〵一日もかくうるひのこ
ひれ反二俗の異ものさ
ま〳〵三宮冬寄言の家仏も
能潔るあの元一日ハ歳こ
ひくいうる仕事も能

のつてゐると云ひ
金銀をおろそか
ふもちる人よりも
米穀をそまつに
もちるものいをつを
知てふりーとを
べーたとー粒方
とも大せりのみせ
むんべあるべくんば
されば金銀八十目
廿日ゐくーもとま
らぬ事あり米八
一日もなくてかるる
いぬものかーまとと
金とうるぐ米一
の稼するものを



人蘇東坡とゆ
る大賢人蘇合
三昔あるゆをも
のとされ方か
やうるる勢わ
い大むーよりれ
るをとくこあし
故てるうへそ後
世の紙ふんとる
べきやうよころ
とくーて出を
つりのこれふ
よってそのいふ
がーもたぶと
るー又今の世の

国恩の報ゝ為る所ゝ
されば又世間とうく奉
ゝ為るべーー又福福者
天三宝あって天ようして
人ゝ授けのあるおあるされど

かーあ死人の只一
人来とけんやく
あってりとふとも
いろみとの芸あ
らんをどいふ人も
あるべなれとも中く
のいてたあぐぎ
人の芸実るを
ちろぎーいづる

勤ざれば学ぶるあり学ぶ
者あり大物ゝ方ゝ為る
の全るも学ぶて方ゝ不
為の勇士ゝ自由ゝ延
ものるまで授るかけ

まで、もそなるめ
ありさるべし。一人
の公二人、ようつり
二人の公十人、うつ
ゞ十人の公百人、
人とあざむくよ、
ひろまる時いつひと
天下の大利と、
べきあるる時いそ
功徳いくばく
されい大学の一家
仁あれば一国仁を
おこす。とかくそれら
の不をすせ、
のあるべき不又、
天の神の

天命を畏み酒を園
で傷ふの十人あつて九人い
あらべく世の欲しるあら
ざるを抑いつなる福福
とも来るべくして来る

あり。夫人間一生
の吟味は果の世
よりきまりある
ゆゑ、あきあり
かきあり、おのく
同じうざるめ
いお生の果報と
よるゆゑされば、
まづ、ある食を

と
まりんとするふるふるて我人たる
同じ所ふ慎を働いて世間
すこの嫌りて当の養生を
ところげ
知て天とりして授ける
まふ大切の寿と傷ふ事

ムひつ也ゞ寿命
ゆ又ゝもゆゝるゝ
定りある食の多
かゝよりて寿命
然ゝ短いあれば蘇
食微食してその
食をのゞたゞ時も
りゞ寿命もまゝ
ゝもゆのゞる是ゆ
よりて世の人の寿
命をゆゝりとも
のゞゝゝゝ
ゝゝゝゝ蘇食
微食せゝよゝゆ神
流あり神とゝ知
らゝりゝのゝゆん

なゝ各父母先祖の恩
道理を能ゝ考へ是を東坡とゆゝ賢
人の蘇食三菜あるゝゝを
中ゝちゝれ又野菜と食して

友ゝ石のゆんさく
又東坡のゝゝを
伝ゞて人ゝ情を
食を延ゝゝも
ゆ寿命をの者
べゝ物又ゝの者
たゝのゝゝゝゝ
かんゞゆれゞ一人一日
ゆゆゆの延寿と

百年と保つゞゞゝゝ
ゝれゝゝゝゝ養食の蘇
命は毒ゝ又養食一日ゝ減
ゝて百年と保ゝれ苟
寿のゝゝれゝゝ

きそつのれば
一月一弗又合
一年一年八弗
十年一石八弗
又十年ホして
九石の米延る也
四て一生の百ホハ
よりと人もすくふ
ろくうえその心ぞ、
ホよりそこいりとぐ業
命ものべ子孫
も又ゆたかなるべー
きことおせもりさぎ
まりある食を一生
又十年九石ふえ
のだせば日こ合

勧善懲悪

責て父母の遺教と大切
ホ米の高値と作て金
思ひ知ぐてきと言ぐ
先祖食二合無き法ないぐ

食のたりすり
して七年此事
命のぶるるの事
一日しりとも命
犯て事の命絶
のだまことを知ん
や考る時ハ日こ
の考ることホー
づのだして生

一日三度より食ものとバ一度を
粥ホて食ぐさのたまをバ一
椀より糧よく二椀ハ多ホ
我身ふの費と為くを是
一ツの益ぞ一椀食の米を

きるの人間一生の
大利なるべし
又我が家くの
人のことをたゞせば
のつたのうも
侍勢天照皇
大神宮の一族
よううまれ出さる
のの子れが世けん
の人いとぐくうぶ
兄弟親ぞく
おうくべうぶ兄
弟親ゐのの子
おうう生るをまそ
見ふこる法あら

延て五家入用と惜く
那國園して頼ゞ生るこれ
二ツ益〻倉を建くして得
買と害人病と防ぐ事
命と保ん是三ツの益〻

んやうれわあま
せある米俗あ
らば世の中の生ら
しき人はかどと
して外の例ろ
とまるべうぶ
業苑するとひた
すらとこまう
い人間さるのく

三倉の役を設して能延
米を救ひ俗面又者ろし
一日ゐ一人お孔子の門業
とすれば十人百人多分人を
教ゆく推しあ是を

そもそもの道賀
思ひ白木の丸
太ばしら
又帰戸張
白もめん
思ひ
すとーを

金時は功徳方こそ其
男こそいとけなく及ぶ子孫
こそ美なれ世を安く富
まるなり
故ふくしきあり
書を信じて一生

一月一年の稼ぎも遊楽
美をもて敬ひ知ればる
あり金宝あのべ富
籠に米は價も安くなりて
庶民国家の助たるべ

酒あらひ米白保のまぎれ元故郷のたまものの人々ま絵まを身一と志べきよしを志めさもさまよ神を勇るとや志るるかのく

三重の御代を祈り或い一往又いま義一に引れ金延して恩の報ず奉り彩り卯とて引るかれ天命の寿を保たて万功来代

けんやくとまうだしん家宅をかざり美板美食を身一と世たちまち志紀の神を崇たびて神だのそうのむ〜んと伊勢ぐ不るあ〜ん故と人々ぜんと述ること神文のどう怪むべし

家長の基を動めん

ひとへに偏に願の初なり

新撰早解百人一首往來

世の百人その人々のそれとところ見の雅言古語を用ひまとり雅言古語と用ひまとり雅言古語と用ひまとり雅言古語と用ひまとり

全編十冊 追々出板 初編一冊近刻

天保五甲午年夏卯月發行 馬喰町二丁目
東都地本錦繪問屋 錦耕堂 山口屋藤兵衛販